

インターパーソナル・コミュニケーションを通じた潜在的公共圏の形成と維持の研究
— 韓国のソーシャルメディア・カフェ「アゴラ」の事例から —

**Research on the Formation and Maintenance of a Potential Public Sphere through
Interpersonal Communication**

車 愛順 (京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程)

【メンバー】

高橋 顕也 (京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程)

【ねらいと目的】

本研究の最も基本的な関心は、オンライン・ネットワーク上における「潜在的な」公共圏の生成の現場にある。本研究は大きくインターパーソナル・コミュニケーションと「潜在的公共圏」の二つの視点に導かれている。インターパーソナル・コミュニケーションは、対面的なインタラクティブ・コミュニケーションともマスメディアを媒介したマス・コミュニケーションとも異なる、ウェブ上における人格を介した第三のコミュニケーション形態であるといえる。しかし、それは必然的に潜在的公共圏を形成するとは限らない。両者の間には、インターパーソナルなコミュニケーションが、新しい公共圏の形成を可能にするという影響関係とともに、既存の公共圏の在り方が、インターパーソナルなコミュニケーションを新たな表現手段として活用するという逆の影響関係も存在すると考えられる。両方のベクトルが噛み合うかどうかは、サービスの内容だけでなく、オンライン・コミュニケーションの制度や文化、さらに当該社会の政治的文化などの社会的背景にも依存するだろう。

本研究は、近年急速に発達を遂げたウェブ上のインターパーソナル・コミュニケーションの場を、潜在的公共圏という視点から研究することによって、絶えず変化している「公共圏の再編成」を論じる一つの視座を提供するものである。具体的に、オンライン・コミュニケーションでの政治的関心の強さが顕著にみられる、カフェとよばれる韓国の一種のソーシャル・ネットワーキング・サービスを対象に事例研究を行い、それがどのような形で公共圏としての潜在能力を有しているのかを検証する。

【活動の記録】

2009年11月2日～12日

調査者：車愛順

調査地：韓国・ソウル

調査目的：文献資料収集、およびインタビュー調査

【成果の概要】

本研究は、インターパーソナル・コミュニケーションの場を潜在的公共圏という視点から検討するものである。目的はインターパーソナル・コミュニケーションが潜在的公共圏になりうるのかを検証することであり、具体的に韓国のソーシャル・ネットワーキング・サービスであるアゴラを対象に事例研究を行った。アゴラを公共圏として捉えている多くの既存研究では、対象としているアゴラでの議論を政治的イシューのみに限定しており、かつ、デモなどのような現実社会での行動を呼び起こした一因として、すなわち結果的に公共圏を生み出したものとしてアゴラを捉えていて、アゴラそのものが公共圏としてのポテンシャルをもっているのかどうかについては、議論がなされていなかった。したがって本研究では、アゴラそのものが公共圏になりうる「ポテンシャル」をもっているかどうかを、政治的イシューとプライベートイシューの両者を対象として分析を行い、それらのコミュニケーションの内部でのリアリティの構築され方を比較することで確認した。

賛否および中立的意見や、その討議的ないし表出的論調の、量的な推移の変化を俯瞰するかがり、政治的イシュー、プライベートイシューともに、公共圏としての潜在能力を示すようなデータは得られなかった。

しかし、議論内容の連関をみていくと、両イシューともにおいて、アゴラ内部にてコミュニケーション自体が自制機能を持つ様相を見せていることがわかった。また、筆者の議論への積極的参加やマスメディアの報道に対して短期間のうちにアゴラで激しい議論が行われ、その議論内部で、議論対象があたかも事実になっているような雰囲気がつくられることもあることも確認された。また、政治的イシューやプライベートイシューを問わず、ある社会的風潮に従って議論されていることが判明した。

以上のようなアゴラ内部の議論内容の多様な連関はアゴラが独自につくりだすリアリティを示すものと考えられる。したがって政治的イシューに限らず、プライベートイシューにおいてもリアリティが構築されており、それはアゴラという場が公共圏にもなりうるポテンシャルをそれ自体でもっていることを示していると言えるだろう。

インターパーソナル・コミュニケーションが公共圏へと成長するメカニズムのより詳しい分析は今後の課題である。

